南西カリマンタンの海洋移民と国家
—1760–1850年—

太田淳（広島大学大学院・准教授）

はじめに

本論文は、1800年前後の海洋移民（海岸部に居住し何らかの海上活動に従事する移民、後に詳述）と国家の関係を考察する。近年ジェームズ・C.・スコットは、近世東南アジアの山間部（ゾミア）において国家支配を逃れようとした人々を考察したが、その中では意図的に海岸部を議論していない［Scott 2009: 174-175］。しかしながら、本論文が検討するように、海岸部における国家–移民関係も、東南アジアの国家・社会構造において非常に興味深い特徴があり、考察に値する。スコットの議論と異なり、南西カリマンタンの海洋移民は、むしろ国家支配者と密接な関係を築こうとした。多くの場合、国家支配者は海岸部を新たな移民に提供し、移民たちは通常、支配者と半ば自律的で半ば依存した関係を構築した。

近世東南アジアにおける海洋移民と国家の関係に関して最も広く知られている研究は、インドネシアおよびフィリピン諸島のスールー・ネットワークを検討したジェームス・フランシス・ワレンの著作であろう［Warren 1981, 2002］。ワレンは、スールー王国のネットワークが、首都のホロ（Jolo）を中心として相当程度に統合されていたことを示した。ワレンの議論は説得力に富み強い影響力を持っているが、そのようによく統合されたネットワークとは、近世海域東南アジアにおいて決して一般的なものではない。多くの地域で、特に18世紀半ばから多数の移民を受け入れて来た南西カリマンタンのような地域では、海洋移民は必ずしも出身地と強い関係を維持することはなく、むしろ受入国家と緩く互酬的な関係を結んだ。ワレン以外の研究者たちは、海洋移民をマレー人、オラン・ラウト（マレー人のうち船上で生活する人々）、ブギス人といった特定のエスニックグループごとに分析する傾向にある［Sopher 1965, Andaya 1995, 2008, Barnard 2007］。しかし多くの場合海洋移民のネットワークは、常にエスニックグループごとに存立している訳ではなく、様々なグループが一緒に活動し、明確なエスニック区分に基づかない混淆したネットワークを築くことが多かった。そこで本論文では、一定の地域における様々なグループの海洋移民に焦点を当てることによって、彼らと国家との関係における複雑さとダイナミズムを明らかにすることを試みたい。

海洋移民は、近世の南西カリマンタンにいるオランダ人にとっても現地住民にとっても、他から明確に区分される一つのカテゴリーを構成していた。1853年に書かれた匿名のオランダ人によるレポートによると、「マレー人」とは共通してマレー語を話すものの、様々な起源を持つ人々である。彼らはさらに、ストラント・ブウォーナー（strandbewoner, 直訳は海岸居住者）と内陸に住む人々という2つのグループから構成された。ストラント・ブウォーナーは数千人で、その全てがリアウ、マラッカ、パハン、クランタン、ケダー、カンボジア、シアク、ミナンカバウ、インドラギリ、パレンバンなどを故地とする外国人で、4-5世代前に南西カリマンタンに到着した。彼らの多くは貿易商人であるが、一方で「海賊」にも従事している。彼らは非常に混じり合って暮らしていて、その服装や外見と海に関連した生活様式によって、文化的に他の人々から区分される［Anonymous 1853: 227-228］。このストラント・ブウォーナーのことを、本稿では海洋移民と呼ぶ。近世の西カリマンタンを扱う研究は、今まで主にオランダを中心とする外部勢力と現地国家との関係を議論し、海洋移民をほとんど取り上げてこなかった。［Veth 1854-56; Van Goor 1986; Somer Heidhues 1998］。P. J. ヴェスの著作『ボルネオ西部（*Borneo's Wester-afdeling*）』は、現在でも参照される基本研究書であるが、その中で彼は、「1786年の戦争によってスカダナより南の海岸地域は完全に見捨てられ、海賊以外はだれも住まなくなった」と述べてい

る［Veth 1854-56: I, 279, 360]。この「海賊」が、以下に述べるように、海洋移民であったというのが本稿の主張である。ヴェスはこの時期の海洋移民を極めてネガティブに描いているが、このことは、たとえ意図的ではないとしても、1819年以降この地に「平和と秩序」をもたらしたオランダ植民地支配を正当化する効果を持った。彼のこの見解は非常に影響力が強く、植民地史観が批判されるようになった後の世代の研究者までも、1786年の壊滅的な戦争から輸出産品の生産が増加する19世紀後半までの時期を、概ね西カリマンタンにおける暗黒時代として取り扱っている。しかし筆者は別稿で、同時代の資料を詳細に検討して、1780年から1820年にかけて地域間貿易に一定の発展が見られたことと、その中で海洋移民が重要な役割を果たしたと論じた。本稿ではさらに、南西カリマンタンにおける海洋移民の役割を植民地国家の構造の中にも位置づけ、18世紀後半から19世紀前半にかけての海洋移民と国家との関係を明らかにすることを試みる。海洋移民は1760年から1820年代にかけては国家において決定的な役割を果たしたが、その後はオランダの影響下という新しい状況に適応するために様々な対応をしたことを論じたい。

南西カリマンタンに限らず、東南アジア全体において、多くの研究が伝統的国家の構造や特徴を論じてきたにもかかわらず、国家における移民の役割は、華人や他のいくつかのグループを除けば、ほとんど注目されなかった[2]。そのような国家中心的な視点が、移民の役割を過小評価してきたとも言えよう。本稿は、南西カリマンタンの海洋移民に焦点を当てることによって、東南アジアの地域史を国家ではなく移動する人々のダイナミクスに焦点を当てて論じ直そうとするものである。

外国人支配者と現地住民

近世西部カリマンタンで国家を建設したのは基本的にみな外国人であり、ダヤック人と総称される現地住民は決して国家を作ることがなかった。16世紀に西カリマンタン最古の王朝であるスカダナを建国したのはマジャパヒトから来た伝説的王子であり、18世紀にムンパワの王となったのはブギス人であった。カプアス川、ランダック側流域には、マレー人が支配する王国が建設された［Veth 1854-56: I, 179-180; Paulus et al 1917-1939: I, 377]。これらの外国人支配者にとって、土着のダヤック人と強固な関係を設立することは、統治の安定のために極めて重要であった。一般に、外国人王朝はダヤック社会を上から支配することに成功した。

現地の伝説によれば、スカダナ王国の創設者はマジャパヒトの王子プラウィ・ジョヨ（Prawi Jaya) である。パワン川北岸に到着したプラウィ・ジョヨは、その高貴な出自によってダヤック人から支持を得ることに成功した。彼はマルタディプラ（Martadipura) と呼ばれる町を設立し、15世紀末または16世紀初めに、その地でラジャとして即位した。彼はまた港市スカダナを建設し、第5代王のパネンバハン・ディ・ラベ（Panembahan di Labe; パネンバハンはスルタンよりも下位の国家支配者の称号）がそれを王都とした。第7代王パネンバハン・ディ・バル・スンギ（Panembahan di Baru Sungi) は、さらに都をスカダナから内陸のマタンに移した。これ以後、この国はマタン王国と呼ばれるようになった。この地で同王は、アラブ地域からパレンバンを経由してやって来たイスラーム教師を迎え入れ、イスラーム教を受容した[3]。

ジャワ人の他に、マレー人もまた西カリマンタンの様々な地域にやって来て定住した。19世紀のオランダの報告書は、彼らは数世紀前にやって来たと思われるが、詳しいことは何も分からないと述べている［Anonymous 1853: 226; Veth 1854-56: I, 184]。マレー人移民と、スカダナやマタンのジャワ人支配層との間では、混血が相当程度に進んだと考えられる。19世紀のオランダ人の報告書の多くが、マタン王国の支配層の人々をムスリムまたはマレー人と記している。このことは恐らく、ジャワ人とマレー人が混血していたことを示していよう。スカダナやマタンのジャワ人支配層にとって、マレー人移民はその文化的親近性から、好ましい氏族パートナーとなったことであろう。マレー人移民は、東南アジア

の多くの地域でそうであったように恐らく商人であり、彼らは支配層と婚姻関係を結ぶことが、彼らの事業にとって有利になると考えたことであろう。ジャワ人植民者の子孫たちは、恐らくそうしたマレー人との接触を通じてジャワ性を次第に失い、ムスリムあるいはマレー人としてのアイデンティティを持つようになったのであろう。

ムスリム支配層はしかし、土着のダヤック人とは自らを厳密に区分した。オランダ人植民地官僚H. フォン・デワル（H. von Dewall) は、1855年頃にマタン、シンパン、カリマタ諸島、クブにおける支配・行政・貿易制度に関する詳細な報告書を作成したが、彼によると、ムスリム支配層は国家行政の重要な役職を独占した一方で、ダヤック人集団の首長たちは下位の地位にとどめ置かれた。王国の領域は、首都と海岸部を除きほとんどがダヤック人の居住地域であったが、パネンバハンは彼らの社会に対しほぼ無制限の権威を行使した。ダヤック人地域は14の地区から成り、パネンバハンはそのそれぞれに、カトゥンドゥック（katunduk) と呼ばれる役人を任命し、彼の権威を代行させた。彼はカトゥンドゥックを、主に彼の親族から、一部を他の有力ムスリム家系から任命した。パネンバハンを補佐する最高位の大臣はマントリ（mantri) と呼ばれ、カトゥンドゥックまたは彼らと強い関係を持つ者から選ばれ、彼らは収入の一部を自らの監督地域から得た。パネンバハンはこれらの役人や大臣を、意のままに任免することが出来た。カトゥンドゥックは首都に居住し、プングラ（pengerah) またはクパラ・クラ（kepala kerah) と呼ばれる役人を任命して、自らの代理としてその監督地域に派遣した。ダヤック社会の自選首長はデムン（demung) と呼ばれ、一つのダヤック人地区のリーダーはデムン・クパラ（demung kepala) と呼ばれた。デムン・クパラはダヤック人の最高位であり、デムンたちによって選ばれ、カトゥンドゥックまたはパネンバハンによって承認された［Dewall 1862: 4-8]。

ムスリム人支配層は、経済的にダヤック人に寄生していた。マタンのパネンバハンやカトゥンドゥックは、様々な税や義務を自らの監督下にあるダヤック人に課していたが、ムスリムはそのほとんどを免除されていた。全てのダヤック人は一定量の米、鶏、ヤシの葉で編んだマット、ダマル樹脂[4]を供出することが義務づけられ、一部の地域では燕の巣といった特産品をムスリム役人に提供しなければならなかった。さらに加えて、ダヤック人のデムンたちは、一定量の米、鉄、マット、籐などを、極めて不利な条件でカトゥンドゥックに売るか、彼がもたらす輸入品と交換しなければならなかった。カトゥンドゥックはこれらの産品を他の商人にはるかに高い価格で売ることによって、「多大な利益」を上げていたとされる。ダヤックの男性はさらにパネンバハンとカトゥンドゥックのために、田を耕し、水を運び、木を切り、家内労働を行う労働提供も義務づけられていた［Dewall 1862: 10-23]。

それではなぜダヤック人はムスリム支配層にそれほど強く服従し、他の地域へ逃れることを選択しなかったのだろうか。恐らくその重要な理由として考えられるのは、ムスリム支配層が、ダヤック社会が必要とする輸入品の貿易を独占していたことである。カトゥンドゥックがダヤック人の産品と交換していたものは、塩、布、タバコ、ビンロウのための石灰など、彼らにとっての必需品であり[5]、これらは全てダヤック人居住地域の外で得られるものであった［Müller 1843: 304; Dewall 1862: 15-17]。恐らくダヤック人は、これらの外国産品を、支配者たちが築いた港を通して得るようになった。実際に、ヨーロッパ人や華人の商人が金やダイヤモンドといった輸出産品を入手する時に、ダヤック人から直接得たことを示す資料は存在しない。スカダナにやって来る外部商人が交渉する相手は常に、沿岸部の港を中心とする国家の支配者であった。1820年代に収集された伝説によると、スカダナは初代王が沿岸貿易と上流地域との貿易を促進することによって、次第に発展したとされる［Müller 1843: 304; Dewall 1862: 15-17]。この時から恐らく支配者たちは、海外と内陸部との貿易を独占したのであろう。

こうして恐らくダヤック社会は、彼らに塩やその他の必需品を売る海岸港市の支配者に、強く依存するようになったであろう。これらの品を安定的に供給することはダヤック

人の生活を安定させ、おそらく彼らの人口を増加させたであろう。実際に19世紀の間に輸入商品はダヤック人の生活に深く浸透するようになっていた。例えば1829年にダヤック人が悪天候のため不作に悩まされた時には、ジャワ米が輸入されてマタンでの米価格を抑制した［Veth 1871: 18]。タンパヤン（tampayang) と呼ばれる金属の鐘は、ダヤック社会において富の象徴であり重要な婚資であったが、1830年代に2-3ギルダーで購入できる中国製の鐘は、数千ギルダーする本物の鐘の安い代替品として流通した。同じ頃、中国製の陶器や安い磁器製の壺や皿は、ダヤック人家庭で一般的な品となっていた［Francis 1842: 6, 8-9]。このようにしてダヤック人は、自分たちの生活を維持するために外国商品を入手する外部ネットワークを必要とした。そうした品を沿岸部の支配者に依存していたために、ダヤック人は国家の支配構造の中で従属的な地位に留まることを甘受したのであろう。

南西カリマンタンにおけるこのような上流-下流関係は、サラワクにおける同様の関係と類似している。ダニエル・チュウは、19世紀初期のイギリス資料を精査して、海岸部のマレー人と上流の現地住民との間に二つの類型があることを指摘した。第一は、マレー商人が現地住民に強制的な貿易を強いるタイプである。彼はマレー商人が、自分たちの米、布、鐘、鉄、塩などの商品を実勢価格の7-8倍で取引することを住民に強いた例を紹介している。第二のタイプは、互酬的な関係である。そのような場合、マレー商人は現地住民、特にイバン族に対し贈り物を提供し、イバン族は宿泊施設と食糧を提供し、彼らの間で取引価格が合意に基づいて決定された。このような違いは、主に現地住民の軍事力の違いからもたらされた。イバン族は、近隣住民に対する襲撃で知られており、マレー人はしばしば彼らと共に戦うことがあった［Chew 1990: 55-58]。イバン族との協力を通して、マレー人は河川交易における戦略的拠点を支配することが出来、それ故に彼らと慎重に互酬的関係を築こうとしたように見える。一方マレー人はダヤック人に対しては支配的な地位を築いたが、これは恐らくダヤック人がそのような軍事力を持たなかったからであろう。

古い時代の資料は断片的にしか存在しないが、このような階層的な関係は、恐らくカリマンタンに外国人支配者や商人が現れた頃から、彼らと現住のダヤック人との関係において支配的であったと思われる。というのも、マレー人が外部貿易にアクセス出来たのに対し、ほとんどの場合ダヤック人はマレー人と対抗するだけの軍事力も経済基盤も持たなかったからである。そのような関係は、恐らくスカダナ王国が設立されて以来、両者の基本的な関係であったと考えられよう。

1760-1828年頃の海洋移民の定住

1760年頃から、南西カリマンタンは新たなタイプの移民を受け入れるようになった。それ以前の移民と異なり、新来の移民は既存の国家から一定の自律性を保つ一方で、国家支配者と緊密な関係を築いた。

初期において、スカダナは移民にとって最も重要な定住地であった。移民にはマレー人が最も多く記録されており、スカダナに定住したマレー人移民の首長で最も有力だったのがグスティ・バンダル（Gusti Bandar) であった。彼はスカダナの影響下にある弱小国家（その名前は資料に記されていない）の王であった。ある時彼は祖国を去り、その後の消息は明らかでない。しかし1765年に彼は、様々な出自を持つ人々から成る大規模な海賊集団のリーダーとして、リアウ諸島のパヨン（Payong) 島からムンパワに移住したことが知られている。彼は恐らく卓越した海賊リーダーとしてリアウ諸島で名声を得て、さらに権力を拡大する機会を求めてムンパワに移住したと考えられよう。数年後に彼は従者と共にスカダナに移住し、その地の王族と強固な関係を築いた。彼は自分の娘を、後にマタンの第6代国王スルタンとなるモハンマド・ジャマルディン（Sultan Mohammad Jamaluddin) と結婚させた[6]。彼はやがてスカダナの支配層の一員となったが、それでも彼は従者と共に、海岸部で海洋移民の暮らしを続けた。

オランダ資料でマレー人として言及される別の移民グループは、より共通した出自を持

つ人々から構成されていた。彼らは東スマトラのシアク王国のスルタン・マフムード・シャー（Sultan Mahmud Shah) の息子であるラジャ・ムサ（Raja Musa) に率いられてやって来た。ラジャ・ムサは王国内部の紛争の結果シアクから追放され、従者とともに海賊として様々な地域を放浪した。数年の放浪ののち、彼らは1765年にスカダナ湾の沖にあるカリマタ諸島に定住した。彼の従者たちがスルトゥ（Selutu) 島にネホレイ・ニュー・シアク（Negorij Nieuw-Siak) と記録される定住地（恐らくマレー語でヌグリ・シアク・バル Negri Siak Baru）を築き、ラジャ・ムサ自身はカリマタ・ブサル（Karimata Busar) 島のセルナイ（Serunai) という集落に住み着いた［Müller 1843: 357-358, 365–372; Raja Ali Haji 1982: 23]。彼らはこれらの島々に定住して、カリマンタン本島の国家から一定の距離と独立性を維持しようとしたのであろう。しかし後述するように、やがて国家の支配者は彼らに接近を試みる。

マレー人の他に、ブギス人やアラブ人もスカダナに移住した。リアウに定住したブギス人の有力リーダーであるラジャ・アリ（Raja Ali) は、1779年以降、従者と共に頻繁にスカダナを訪れ同地に滞在するようになっていた[7]。アラブ人はムンダウ（Mendau) 川に沿って定住し、主にカプアス川上流地域との貿易に従事した［Müller 1843: 343-344]。

このようなスカダナの事例は、海洋移民の定住における典型的なパターンと言える。ほとんど全ての移民が、河川貿易であれ海上貿易であれ、貿易に従事した。彼らの多くはスカダナ定住以前に「海賊」経歴を持っており、その後も襲撃や通行船からの通行料の徴収を続けた［Müller 1843: 245-46, 358, 371; Raja Ali Haji 1982: 187]。彼らの出身地は様々であり、特に「海賊」集団はその内部に多様な出自の人々を抱えていた。強い軍事力はより多くの貿易の機会を約束したことから、彼らの貿易と襲撃はしばしば結びついていた。

このような商業/軍事集団の移民は、中国・東南アジア貿易の進展、およびジョホール王国の都リアウの発展と強く結びついていた。18世紀を通じて、中国の経済先進地域の住民は、様々な東南アジア産の大衆消費産品―錫、胡椒、燕の巣、ナマコやフカヒレといった食用海産物、籐や樟脳などの森林産物―を強く求めるようになった。これらの産品の消費は、ケネス・ポメランツが指摘する「消費社会」や「中間層の贅沢」が、18世紀の中国で発展したことと関連づけられるであろう［Pomeranz 2000: 114, 151, 158]。中国からのジャンク商人に加え、ヨーロッパ商人、特にイギリス商人も、広東における茶貿易を促進する目的で、中国市場で人気のある東南アジア産品を積極的に収集しようと試みた。リアウ王国の主な住民であるマレー人とブギス人たちは、インドネシア諸島一帯で上記の産品を収集してリアウに持ち帰り、華人やイギリス商人のもたらす中国産品や、綿布やアヘン等のインド産品と交換した。彼らは多くの拠点をインドネシア諸島に築き、そこに定住する者も少なからずいた［Lewis 1995: 87–88, Trocki 1979: 17–25, Vos 1993: 121–25, Reid 1997: 60–61]。スカダナはそのような移民定住地の一つであった。

ポンティアナックは、もともとそのような貿易ブームにおける、典型的な海洋移民定住地として設立された。しかしその他の定住地と違うところは、それがすぐに国家となったことである。設立者シャリフ・アブドゥルラフマン（Sharif Abdulrachman) は、ハドゥラマウト出身のイスラーム法学者サイード・シャリフ・フセイン・ビン・アフマド・アルカディリ（Sayid Sharif Husein bin Ahmad Alkadri) の息子である。彼の父は1734年にまずスカダナに定住し、1750年にムンパワに移住した。シャリフ・アブドゥルラフマンの母は、スカダナのスルタンによってシャリフ・フセインに与えられたダヤック人奴隷女性であった。1764年、22歳の時にシャリフ・アブドゥルラフマンは故郷を離れ、バンジャルマシンに海賊集団を設立し、そのリーダーとして何年もカリマンタンの南および東海岸を荒らし回った。その後シャリフ・アブドゥルラフマンはカプアス川とランダック川が合流する要衝の地であるポンティアナックに拠点を築いた。彼の親族と様々な出自の者から成る彼の海賊集団の約200人の構成員が、1772年にほぼ無人の地に設立されたポンティアナックの最初の定住者となった［Ritter 1839: 413-418; Veth 1854-56: I, 249-254; Van Goor 1986: 92-96, Som-

ers Heidhues 1998: 279-281]。ポンティアナックはしばしばアラブ系王朝とも言われるが、このように実際には典型的な海洋移民定住地として始まった。国家建設における重要な要素は設立者のアラブ起源ではなく、襲撃と貿易の成功によって海洋移民を引きつける彼の能力と名声であった。

ポンティアナックはその後重要な貿易港に発展し、さらに多くの海洋移民を引きつけた。華人、ブギス人、マレー人、ムンパワ、サンバスその他の地からやってくる者が町の周囲に定住し、内陸部との貿易に従事して、籐や蜜蝋などの森林産物を収集した［Ritter 1839: 420; Veth 1854-56: I, 255][8]。

西カリマンタンの政治経済的状況は、1784–86年頃に大きく変容した。オランダ東インド会社の幹部たちは、リアウを中心とする貿易の発展が彼らの貿易を阻害していることに、長年苛立っていた。彼らはオランダ海軍の支持も得て、1784年にリアウを攻撃した。リアウのブギス人のリーダーで副王の称号を持つラジャ・ハジ（Raja Haji) が戦闘で死亡すると、先述のラジャ・アリがすぐにその地位を引き継ぎ、従者を連れてムンパワに向かい、さらにスカダナに移住した。ラジャ・アリはスカダナに要塞を備えた居住地を築き、その地で貿易を促進した。スカダナはすぐに周辺地域の商人だけでなく、華人やイギリス人も訪れる繁栄した港となった［Leyden 1814: 27–28; Raja Ali Haji 1982: 187]。スカダナはこのように、リアウ陥落後の代替港として台頭したと言える。

リアウからのブギス人移民によるスカダナの繁栄は、再びオランダ人と、近隣のポンティアナックの支配者を刺激した。共通の敵を持った両者は同盟を組み、1786年にスカダナと、もう一つ別のライバルであるムンパワを攻撃した。ラジャ・アリとブギス人従者はシアンタン島に逃れ、スカダナのスルタンは内陸部のダヤック人居住地であるガヨンに逃亡し、その地を新たな首都とした。この勝利は、ポンティアナックが西カリマンタンにおける内陸河川貿易および海外貿易に相当程度の支配を確立したことを意味した。スカダナ周辺の現地住民や外国人もまた内陸部に避難し、海岸地域は完全に見捨てられた。

筆者は別稿で、このスカダナの陥落は、ヴェスを初めとする先行研究が想定したような、南西カリマンタン沿岸部全体の衰退を意味するものではなかったと論じた［Ota 2010]。第一に、ポンティアナックの貿易センターとしての急速な発展は、海産物や森林産物を輸入するために南西カリマンタンのその他の港との貿易を必要とした。第二に、スカダナの陥落は実際に幾つもの小国家や半自立的地域–クブ、シンパン、クタパン、クンダワンガン、カリマタ諸島など–の成長につながった。これらのすべては1786年以降に海洋移民を受け入れて成長し、彼らが貿易の発展の上で重要な役割を果たした。こうした地域の支配者は、土地を提供したり柵などの防衛設備を作ったりして、熱心に移民を奨励した。移民の多くは「海賊」的経歴を持っていたが、実際には彼らは海産物の収集と貿易や支配者の求めに応じて海戦に参加するなど、他の様々な活動に従事した［Ota 2010]。

相互協力：国家と海洋移民

支配層に吸収されなかった海洋移民は、国家との間にどのような関係を築いたであろうか。それは、より古い時代にジャワ人支配層と一体化したマレー移民とどのように異なっていたであろうか。18世紀半ば以降、国家支配者は通常、海洋移民の知識と技術を利用するために、彼らに積極的に関与した。海洋移民もまた彼らの利益を拡大し国家の中での地位を強化するために、しばしば支配者と協力的な関係を構築した。国家支配者と移民との間の折衝や後者の貿易については別稿で詳細に論じているので［Ota 2010]、ここでは幾つかの新しい資料を参照しつつ、両者の関係を構図化することを試みる。

貿易は、国家が海洋移民に期待する最も重要な活動であった。彼らは生産地から森林産物や海産物をシンパンやポンティアナックといった地域の中核港にもたらし、されにそれをシンガポールその他の外部地域に輸出した、また、彼らはシンガポールなどからの輸入

品を、南西カリマンタンの小さな港町に運んだ［Ota 2010: 86-90］。河川交易では、海洋移民は海上貿易の場合よりも国家とより強い協力関係を必要としたように見える。カプアス川では、上流から得られる貴重な品々の貿易をめぐって、多くのグループの間で競争が生じた。1770年代にポンティアナックがカプアス上流の貿易に参加した時、最初に河川貿易で主導的な役割を演じたのはブギス人であった。彼らは首相にあたるマンクブミ（Mangkubumi）の保護を得て、上流地域のダイヤモンドと金の輸出を独占した[9]。スルタンは移民商人から税金を徴収したので、彼が貿易の促進に熱心だったのは言うまでもない[10]。しかし1810年までに、ブギス人は海外貿易により集中するようになっており、ペナン、ジャワ、バリその他の地域に船を送っていた［Leyden 1814: 50-51］。その頃までにカプアス川上流の貿易を支配するようになったのは、ポンティアナックに拠点を置く華人商人であった。この時彼らは、現地国家ではなく、疑似国家とも言える上流金鉱地域の華人公司（共同投資者・生産者団体）と協力関係を築き、他のライバルよりも有利な立場に立った。彼らは華人の金鉱労働者たちに必要とされるアヘン、タバコ、ガンビル（キンマの葉、ビンロウの実、石灰などと合わせて口中清涼剤とする）をポンティアナックのジャワ人、マレー人、ブギス人商人などから得て、マンドル、モントラド、スラカウなどの金鉱地域に運んだ。そこで彼らは砂金を購入し、それを中国に送った[11]。ブギス人から華人へという河川貿易の主役の交代は、ポンティアナック国家と華人公司との間の上流地域産品をめぐる競争の結果でもあった。後者がそうした産品、特に金の貿易を支配するに至って、ブギス人もまた河川貿易における主導的地位を失った。

海洋移民の海産物を集める技術も、国家支配者が彼らにアプローチするもう一つの重要な理由であった。カリマタ諸島は特に、鼈甲、ナマコ、牡蠣やその他の貝類などの海産物を産することで知られていた。マタンのスルタンとシンパンのパネンバハンは、必ずしもカリマタ諸島に有効な支配を及ぼしていたわけではなかったが、その地の燕の巣に対しては権利を主張し、住民に収穫物を一定価格で売るよう強制していた［Müller 1843: 361-362, 367-370］。ところが、必ずしも支配者の直接支配下にいるわけではない海洋移民たちは、完全にその命令を受け入れることもなかった。彼らは年間9ピコルの燕の巣をスルタンに売っていたが、支配者たちは、彼らは実際20ピコルを得ており、残りを自由に商人たちに売っていると確信していた[12]。

海洋移民の軍事力もまた、彼らの国家との関係を規定する重要な要素であった。少なからぬ移民が南西カリマンタン周辺で海賊行為を働いていたにもかかわらず、支配者たちはそのような暴力組織の存在に寛容であっただけではなく、彼らと協力しようと試みた。支配者たちがそのような態度を取ったのは、彼らが実際に移民を排除するだけの力を持たなかったことに加えて、近隣のライバルとの抗争に海洋移民の軍事力を利用したかったからであった。例えば、スカダナが1770年代末にランダックやポンティアナックと抗争した時には、スカダナに定住した「海賊」集団のリーダーであるグスティ・バンダルが、ランダックその他の金鉱地域を攻撃した[13]。ポンティアナックとサンガウが抗争に陥った時は、ポンティアナックのスルタン・アブドゥルラフマンは、カリマタのシアク人コミュニティのリーダーであるラジャ・ムサに軍事支援を依頼した。ラジャ・ムサは従者を率いてサンガウを攻撃し、ポンティアナックの勝利に貢献した［Müller 1843: 371-372］。国家支配者と海洋移民はしばしば軍事支援に関する合意を文書の形で残した。あるオランダ東インド会社の記録によれば、1776年10月にポンティアナックのスルタン・アブドゥルラフマンとブギス人およびマレー人の首長は、お互いに危機に遭遇した時には相互に援助し合うことを文書で契約していた。

このような海洋移民からの協力と引き替えに、支配者たちは種々の利益や特権を提供した。第一に、支配者たちは彼らに定住のための土地を用意した。スカダナの第13代王スルタン・エンドゥラ・ラヤ（Sultan Endra Laya）は、移民たちにスカダナ湾岸の土地と彼の領土の西部および南西部海岸を提供した［Müller 1843: 343-344］。ポンティアナックでは、王

国内で居住地を選ぶ自由とそこから立ち去る自由が移民に認められていた。「自由な往来（マレー語でburung terbang、直訳は飛ぶ鳥）」の原則は、特にブギス人とマレー人の移民に適応された［Ritter 1839: 420]。第二に、税金やその他の義務からの免除は、しばしば移民に認められた特権であった。1855年のフォン・デワルの報告書によると、クタパン、シンパン、スカダナでは、「外国人とその子孫たち」―恐らく移民を意味する―は、少量の労働供出は課されたものの、スルタンに対するあらゆる税を免除されていた［Dewall 1862: 44, 95, 109]。さらに、支配者たちは、海洋移民の軍事貢献に対して特別な報酬を用意した。先述のラジャ・ムサが戦闘で死んだ時には、ポンティアナックのスルタン・アブドゥルラフマンは、彼をスルタンたちの墓地であるバトゥ・ラヤンに埋葬し、彼の遺族の一部にはポンティアナックに定住してそこからバンカ、ブリトゥン、スマトラに海賊活動に出ることを許可した［Müller 1843: 343-345]。このケースは、スルタン・アブドゥルラフマンが、ラジャ・ムサの軍事支援への感謝の徴として、その遺族に海賊行為の特権を供与したことを示していよう。

海賊行為は海洋移民が提供したもう一つの重要な技能であり、それはしばしば支配者との協力のもとで実行された。例えばブンガドンでは、マタン王国のスルタンと一部の有力者たちが、常に6-8隻の大型船を海賊航海用に停泊させていた。同様にカリマンタンの他の地域の支配者や有力者たちも、同じ港に8-9隻の船を置いていた。この地を拠点とする海洋移民がこうした船を使ってカリマタ諸島、カリマンタン一帯、ブリトゥン、リアウ、ジャワなどへ襲撃に出かける時には、船の所有者たちはさらに食糧その他の必需品を提供し、見返りに略奪品の一部を受け取った。しかし略奪品の分配は常に船の所有者と乗組員との間で、紛争の種となった［Müller 1843: 245-246; Ota 2010: 92]。このように国家の支配者層と海洋移民は、前者が船、食糧、必需品を供給し、後者が人員と技術を提供することによって互いに協力していた。略奪品の分配が難しかったという事実は、移民も一定の交渉力を持っていたことを意味しよう。

実際、略奪品の貿易は利益の出る事業であった。毎年海賊シーズンの終わりになると、海賊に従事した移民たちはクンダワンガンやブンガドンといった特定の港に略奪品を持ち寄り、そこではブルネイ、リアウ、リンガ、ブリトゥン、バンカ、スマトラ海岸部からの商人たちが彼らを待ち受けていた。マタンやその他の王国の有力者層は海賊ビジネスに投資または関与することによって、王国内での勢力を拡大し、実際彼らの中にはスルタンからほぼ独立する者もいた［Müller 1843: 245-247, 297; Ota 2010: 87]。このように海賊ビジネスでの成功は、富だけでなく政治的権力の源でもあった。

しかし、好戦的な海洋移民と国家支配者との間の協力は、常に継続的で安定的でもなかった。海洋移民が服属する対象を変えること、または同時に複数の支配者に服属することも稀ではなかった。先述のように、グスティ・バンダルは国王の息子と自分の娘の一人を結婚させていたが、彼は別の娘をサンバスのスルタンと結婚させていた［Müller 1843: 345]。スール一出身で、1786年にスカダナに定住したダトゥ・チャメラン（Datu Camerang) は、マタンのスルタンと30年以上も密接な関係を維持していた。ところが彼は1820年代初頭までにブルネイに移住し、すぐにその地の支配者との強固な関係を築いて、ブルネイでもっとも有力な首長の一人となった［Müller 1843: 345]。海洋移民のリーダーたちにとって、支配者と協力関係を構築することは彼らの地位を強化するための有効な戦略であり、服属対象の変更や二重の服属は、彼らにとって倫理上の問題となるものではなかった。

オランダ支配の陰で

1828年から29年にかけて、南西カリマンタンでは、海洋移民の運命にも大きな影響を及ぼす体制変化が生じた。1827年12月、マタン王国とオランダ植民地政府は抗争に陥った。あるオランダ船がカリマタ付近で座礁した時、マタンのスルタン・モハンマド・ジャマルッディン（Sultan Mohammad Jamaluddin) は、現地の習慣に従ってその積荷に対する権利

を主張した。しかし、リアウ諸島ガラン島出身でカリマタ諸島に定住したオラン・ラウト移民のリーダー、バティン・ガラン（Batin Galang）は、スルタンの主張に反対した。この数年前にバティン・ガランは、カリマタ諸島のシアク人コミュニティのリーダーであるラジャ・アキル（Raja Akil）に会っていた。ラジャ・アキルは1772年に父であるラジャ・ムサが死ぬとその地位を継承し、それ以降オランダ植民地政府と密接な協力関係を構築していた。1819年と1822年に政府がパレンバンと戦争を行った時には、政府の要請に応じて軍事力を提供し、その見返りとして彼はカリマタの支配者（レヘント regent）に任命された［Ota 2010: 91-92］。ラジャ・アリと会った結果、バティン・ガランは「海賊生活を捨て」オランダ植民地政府の「信頼できる従者となる」ことを決意した［Barth 1896: 12］。彼がオランダに服従した真の動機は明らかではないが、植民地政府が西カリマンタンに次第に支配を固めつつあるのを見て、政府に服従することで自分の地位を安定させようとした可能性は高いと言えよう。カリマタ諸島の有力者であるバティン・ガランは、船の積荷はオランダのものであると主張して、スルタンへの引き渡しを拒んだ。これに対しモハンマド・ジャマルッディンは22隻から成る船団を派遣して、バティン・ガランとその兄弟を殺害し、積荷を奪って彼の首都であるガヨンへと運ばせた。この知らせを聞いたバタヴィア政府の全権委員レオナルド・デュ・ブス・ヒスニース（Léonard Du Bus de Gisgnies）は直ちに1隻のフリゲート艦、2隻のスフーナー艦、3隻の砲艦から成る船隊を派遣し、ラジャ・アキルも彼の9隻の伝統的帆船から成る船隊と共にそれに合流して、1828年7月、ガヨンに向かった。船隊が到着した時には、スルタンと主な有力者たちは、すでに内陸部に逃亡した後であった［Barth 1896: 12-13］。

オランダ植民地政府はモハンマド・ジャマルッディンを退位させ、代わりにラジャ・アキルを新たに設立したニュー・ブリュッセル（Nieuw Brussel）王国の支配者に任命した。この新王国はスカダナの町とその周囲、シンパン、およびカリマタ諸島から構成され、ラジャ・アキルはスルタン・アブドゥル・ジャリル・シャー（Sultan Abdul Jalil Syah）と自ら改称した。ところが、スルタン・モハンマド・ジャマルッディンが1829年に亡命先で死亡すると、植民地政府は彼の義弟の息子であるパンゲラン・アディ・マンクラット（Pangeran Adi Mangkurat）をその後継者として任命し、彼がパネンバハン・アノム・クスマ・ナガラ（Panembahan Anom Kusuma Nagara）という新たな名でマタン王国の支配者となることを承認した。問題は、このマタン王国がニュー・ブリュッセルを領域の一部に含んだことである。当然ニュー・ブリュッセル（現地の人々はスカダナと呼んだ）はこの決定に激しく反発し、重複する主権をめぐってマタンと抗争に陥った。長い争いの後、ようやく1845年にオランダ植民地政府が仲裁して、両王国は完全に別個の領域と主権を持つことを互いに承認し合った。この出来事の後、オランダ植民地政府は、両王国とたびたび条約を結び直し、次第に支配者から権力を奪い、国内に影響力を及ぼすようになっていった。

その後のスカダナが、「子供っぽく、強欲で、権力に飢えた」スルタン・アブドゥル・ジャリル・シャーの悪政によって、かつての繁栄を取り戻すことがなかったという理解［Paulus (et al) 1917-1939: III, 818］は、研究者の間で合意を得ているように見える。しかしこの理解は、フォン・デワルがフィールド調査をもとに1855年に記した詳細な報告書を読むと、再考が必要であるように見える。第一に、新たな秩序のもとで貿易は復活した。植民地政庁は、スカダナとポンティアナックの2港を、西カリマンタンにおける唯一の国際港として指定した。その結果、ポンティアナックよりも南の地域を目指す全ての船舶は、スカダナで関税を払うために停泊することが義務づけられた。これによって実際にジャワやシンガポールを出航した船が、スカダナに寄港するようになった［Dewall 1862: 110-111］。この時期のスカダナの貿易量は明らかでないが、1820年代まで繁栄していたシンパンが、19世紀半ばに完全に衰退したことは分かっている。このことは恐らく、南西カリマンタンの貿易がスカダナに集中するようになった結果である。従って、今まで考えられていたように、スルタン・アブル・ジャリル・シャーの統治期に、スカダナの貿易が急速に衰退し

たとは考えにくい。

第二に、スルタン・アブル・ジャリル・シャーの即位後、スカダナは海外からの移民を再び引きつけるようになった。1832年に、スカダナの町には1人の行政官と20人の兵士の他に、400人のマレー人が住んでいた［Francis 1842: 32]。1855年には同じ町の人口は438人となり、その周囲の10の集落には606人が住んだ。この時にスカダナの町の住民は69人の王族およびその従者、319人のその他のマレー人（ミナンカバウ、バンカ、リンガその他の地の出身者を含む）、21人のジャワ人、10人のブギス人、6人の華人とその他少数の人々から構成された。周囲の集落の人口は、408人がマレー人、4人がジャワ人、7人がブギス人であった。興味深いことに、これらの全てが「外国人」であり、ここに明記されていない残り全ての住民はオラン・ブキット（Orang Bukit; マレー人とダヤック人の混血）で、純粋なダヤック人はスカダナ（ニュー・ブリュッセル）王国にはいないとされている［Francis 1842: 32]。これらの数字から分かることは、スカダナの町の人口は1832年から55年にかけて大きな変化は見られないが、町の内部と郊外に様々なグループの「外国人」が定住したことである。これらの「外国人」が、移民の典型的な特権である、免税措置を受けていたのに対し、オラン・ブキットには様々な税と義務が課されていた［Dewall 1862: 109]。このように19世紀半ばまでに、スカダナは再び多くの外国人移民を引きつけていたのであり、これは町の繁栄を意味すると言えるであろう。

スカダナ郊外に住むマレー人の一部は、海洋移民に典型的な技能を持っていた。例えば、バンカとブリトゥンから来た8世帯の移民は、シャリフ・ハサン・ビン・フシン・ビン・シャハブ（Sharif Hasan bin Husin bin Syahab) という人物―背景は不明だが恐らく現地有力者の一員―の監督下に置かれていた。彼らは、典型的な海洋移民の技能である、燕の巣の採集に従事していた。彼らは近くのパルンガン（Palungan) 地域で得られる、最高級の燕の巣を採集した。ハサン・ビン・フシン・ビン・シャハブはさらに採集を拡大するために新しい集落を作るなどしていたが、彼が没すると移民たちは全員別の場所に移住してしまった。この例は、移民の活動が相当程度、受入地域の有力者の態度に依存していたということである。1849年にスルタン・アブドゥル・ジャリル・シャーが死んだ時にも、多数の「外国人」がスカダナを去ってカリマタ、クタパン、その他の場所に移住した［Dewall 1862: 108-109]。海洋移民に好意的な支配者の存在は、彼らの移住における重要な要素であり、そうした支配者がいなくなると、彼らは即座に別の地に移住することもあったと言えよう。詳しい事情は不明だが、スルタン・アブル・ジャリル・シャーの死後、スカダナは海洋移民に魅力的な地ではなくなったようである。

ポンティアックもまた移民を受け入れ続けた。1832年に、ポンティアナックの人口は、900人のアラブ人、10,000人のマレー人、6,000から7,000人のブギス人、2,000人の華人、15人のヨーロッパ人と彼らに使える170人の兵士と30人の使用人からなっていた［Francis 1842: 28]。ポンティアナックの貿易は、バタヴィアやシンガポールとの関係が強まって、1828年から上昇し始めた。特にシンガポールには、ポンティアナックに拠点を持つ商人が、金、ダイヤモンド、錫、籐などをもたらし、ベンガルやマドラスの綿布および鉄製品を持ち帰った［Anonymous 1829]。ブギス人は、華人がカプアス上流域の貿易を支配するようになった後も、ポンティアナックの海外貿易で重要な役割を果たした。ブギス人の人口は、商業機会を求める移民が続いて増加したが、この時までに彼らはオランダ当局を保護者と見なすようになっていた。オランダ人官僚はブギス人を、彼らがきちんと納税しオランダ人を信頼したことから、ポンティアナックの「最良の住民」と見なし、必要があればいつでも金を貸した［Veth 1871: 17-18] とされる。ブギス人は恐らく、華人との競争に勝つ目的からオランダ人保護者を必要とし、その信頼を得ることに成功したのであろう。1832年に、そうしたブギス人の大半は南スラウェシのワジョ（Wajo) 出身で、彼らは戦時にはスルタンを支援するという条件でポンティアナックに定住した［Francis 1842: 18-19]。今やブギス人はオランダの保護を得ていたが、それでもスルタンとの関係においては、好

戦的海洋移民としての特徴を維持していたと言える。

クタパンもまた、マタン王国だけでなく南西カリマンタン全体における重要な貿易港へと発展した。オランダ植民地政府は、ポンティアナックを出港しジャワへ向かう船には、クタパンへの寄港を許可した。ジャワへ向かう商人たちは、ダヤック人によって集められた籐、樹皮、蜜蝋などの森林産物をクタパンで入手した。ポンティアナックに向かう船は、クタパンで燕の巣、鼈甲、グッタ・プルチャ、籐、蜜蝋などを購入した。これらの品々は、その大半がポンティアナックからシンガポールへと再輸出された。1850年代にクタパンの住民の全ては、ブルネイ人、ブギス人、南カリマンタン・サンピット（Sampit) 出身のバンジャル人などの移民であり［Dewall 1862: 45-46]、彼らの大半は海産物の収集とポンティアナックやマタン王国内の港との貿易に従事していた。つまり、彼らは新たな環境下においてもなお、海洋移民としての伝統的な役割を維持していたと言える。

海洋移民はまたカリマタ諸島でも活発であった。1850年代カリマタ諸島では、先述のシアク出身マレー人集団と、オラン・ラウトの集団が2大グループであり、それぞれ315人と101人の人口を有していた。これら二つのグループを同時に治めていたのが、スカダナのスルタン・アブル・ジャリル・シャーの弟であるトゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファル（Tengku Panglima Besar Jafar) であり、兄であるスルタンとの対立からカリマタに追放された人物であった。オランダ植民地政府は彼の地位を承認し、彼にカリマタのオッパーホーフト（opperhoofd; 直訳は上級首長）という称号を与えた。するとシアク人の集団は、自ら選んだオンダーホーフト（onderhoofd; 直訳は下級首長）を廃位して、彼を歓迎した。シアク人集団はまた、海洋移民の特権として、あらゆる税や強制労働を免除された［Dewall 1862: 124-126]。

フォン・デワルによれば、オラン・ラウトはジョホール王家において一種の奴隷（serf) と考えられており、シアク王朝の子孫たちは自分たちがその重要な分家であると認識していたので、オラン・ラウトに対して上位権力を主張していたとされる。しかし、資料を詳細に検討すると、彼らの関係はより微妙なものである。オラン・ラウトは、自分たちが服属する主人を自由に選ぶことが認められた一方で、主人たちは彼らに厳しい罰則を科したり別の人物へ売ったりすることを認められていなかった。オラン・ラウトは主人の船や家を作るために木を切るなど労働力を提供し、船の漕ぎ手となることが義務づけられていた。彼らはまたナマコや鼈甲などの海産物、樹脂や樹皮などの森林産物を集め、一定の価格で主人に売るか一定量の米と交換することも義務とされていた、しかしトゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファルは、彼のオラン・ラウトの従者たちに、彼らの収穫物をまずブリトゥンで売り、その残りだけを彼に持って来ることを許可した。彼は恐らく、燕の巣から安定した収入を得ていたことから、そのような寛容な措置を認めていたと考えられる。カリマタでは800カッティの燕の巣が集められ、そのうち135カッティには常に彼の権利が認められた［Dewall 1862: 124-128]。恐らくそのようなトゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファルの寛容なリーダーシップのために、オラン・ラウトはカリマタでシアク人集団の権威を受け入れたのであろう。

ところがオランダ植民地政府は、カリマタでバティン（batin) と呼ばれたオラン・ラウトの自選首長の権威を認め、彼らに一定の給与を支払い始めた。恐らく政府は、このようにしてオラン・ラウト社会をシアク人の影響から切り離し、より強い支配を彼らに及ぼすことを試みたのであろう。しかしこの政策は予期された効果を得られなかった。オランダ当局の支持を得ていることは、トゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファルの影響下にいるオラン・ラウトたちに、いい印象を与えなかった［Dewall 1862: 128]。

トゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファルは実際、彼の従者たちを苦境から救おうとする強いリーダーシップと起業家精神によって、彼らを引きつけていた。フォン・デワルが1855年11月にカリマタを訪れた時、オラン・ラウトたちはイワツバメの営巣地域が変化したことによる燕の巣の減少と、それに伴う現金や食糧の不足に苦しんでいた、フォン・デ

ワルは彼らにトウモロコシや根菜の栽培を推奨したが、トゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファルは、新たな事業を始めようとしていた。彼は1,500ギルダーを投資して船を用意し、それによって染料となるカリマタ産のソガおよびトゥンガル樹脂をジャワに輸出しようとしていた。それらから得られた金で、彼は従者たちのために米やその他の必需品を購入することを計画していた［Dewall 1862: 127-128]。このプロジェクトが成功したかどうかは不明であるが、少なくとも彼のリーダーシップは、植民地政府の影響下にある首長のそれよりも強かったことは明らかである。

このように、スカダナ、ポンティアナック、カリマタといった地域が、オランダが影響力を強める環境下でも活発な貿易を維持したのに対し、クンダワンガン、クブ、シンパンといった地域は衰退した。クンダワンガンでは海洋移民が去り、クブやシンパンでは彼らは生活基盤を地上に移した。

1850年代のクンダワンガンは、いまだ輸出産品の主要な生産地ではあったが、もはや海洋移民の居住地ではなくなった。クンダワンガンを構成する5つの地区のうち、4つは米と、籐、樹皮製のロープ、沈香などの森林産品を産出し、一つが燕の巣を支配者に提供した。さらに、クンダワンガンでは鼈甲やアガルアガル（海藻の一種）が集められ、クタパンなど近隣の都に送られた。しかし、1850年代には、クタパンにやって来る移民の情報は皆無となる。海上貿易に従事した者は「ムスリム」と記されており、通常19世紀の西カリマンタンにおいてそれは長期にわたって定住するマレー人を意味しており、海洋移民とは見なされない。森林産品を収集しているのはダヤック人である。生産者と商人の間に不利な取引が強制されない「自由貿易」は通常海洋移民に与えられた特権であるが、これが供与されているのは先述のクンダワンガン産品のうち、燕の巣の取引だけである一方、ダヤック人には森林産品の供出と、彼らの米を輸入される塩、磁器、布などと不当な条件で交換することが義務づけられていた［Dewall 1862: 35-37, 46-47]。1820年代にクンダワンガンで支配的な地位にいたイラヌン人は［Ota 2010]、1850年代までに誰もいなくなっていた。このようにして海洋移民は、燕の巣の採集者を除いて1850年代までにクンダワンガンからいなくなり、代わってダヤック人による森林産物の収集が重要な産業となった[14]。

1855年頃、クブの首都にはわずか27人のマレー人と8世帯の華人が暮らすのみであり、1822年における400-500人［Ota 2010] から大きな人口減少となっていた。クブの貿易の全てはポンティアナックとの間で行われており、主要な輸出品は干し魚、トラシ（魚のすり身から作ったペースト）、籐、蜜蝋、沈香、ラカ木、そしてソガ樹脂であった。かつて首都に住んでいた人々はその時までに郊外に移ったように見える。というのは、周辺の4つの集落に、76世帯のマレー人と20世帯のブギス人が住んでいるからである。これらのマレー人とブギス人はみな農業労働者であり、華人は農業労働者か漁師であった［Dewall 1862: 139-140]。南西カリマンタンのマレー人、ブギス人、華人移民はおおむね海洋的で起業家精神に富んでおり、彼らが港市クブの周辺で農業をするために直接移民してきたとは考えにくい。彼らは恐らくかつては海洋移民であったが、その頃までに海洋的な生活を捨てて農業労働者になったと考えられる。周辺地域を含めたクブ全体の人口はこの30年間であまり変化していないが、人々は港の近辺から郊外の集落に移り、農業に従事するようになった。

1820年代に重要な港市であったシンパンも、1850年代までには地域貿易における主導的な地位を失っていた。かつてシンパンの港で貿易に従事した海洋移民のうち、マレー商人たちは彼らの拠点を上流地域に移した。1855年のフォン・デワルの調査によれば、かつてのマタン王国の支配者とマレー商人、そしてダヤック人たちは、彼らが異なる地域に分かれて住むこと、そして王族やマレー商人たちはダヤック人地域に3日以上滞在してはならないことを取り決めていた。しかし1850年代までに、王族とマレー商人たちはもはやこの規則を守っておらず、ダヤック人地域に数ヶ月から1年以上滞在することがあった。彼らはそれぞれのダヤック集落にある、バレイ（balei) と呼ばれる集会所に滞在した。バレイは

また、王族やマレー商人が貢納品を受け取ったり、セラ（serah）取引と呼ばれる不平等貿易をダヤック人と行ったりする場であった。セラ貿易では、商人たちは塩、タバコ、山刀、斧、様々な染織品、粗末な磁器などダヤック人にとっての必需品を、彼らが提供する米と一定の比率で交換した。ダヤック人はまた蜜蝋、テンカワン油、グッタ・プルチャ、沈香、ラカ木、樹皮などの内陸産品を、同様の方法で提供した。セラ貿易をさらに促進するために、マレー商人たちは自分たちの集落をダヤック地域の近隣に作った。彼らの多くはシンパンから来ていたが、一部はポンティアナックから来ていた。フォン・デワルは彼の報告書の中で、マレー商人たちはダヤック社会の癌であると述べている［Dewall 1862: 90-95]。19世紀半ばまでに、かつて港市シンパンで貿易に従事していたマレー商人は、港の近くに住むことをやめ、内陸部に定住する生活を選んだのであった。

おわりに

近世西カリマンタンでは、国家は内陸産品と輸入品との貿易を支配する外国人支配者によって設立された。先住民であるダヤック人が海外貿易に参加する機会を制限することによって、ジャワ人やマレー人やブギス人の外国人支配者は、ダイヤモンドや沈香といった貴重な内陸産品と、塩やタバコといったダヤック人の輸入必需品を交換する貿易を独占した。そうした輸入品のダヤック人の生活における重要性のために、ダヤック人は沿岸部の国家支配を避けることを選択しなかったと言える。彼らは輸入品を受け取る代わりに、沿岸国家の政治的権威と不平等貿易を受け入れた。

南西カリマンタンにおいて海洋移民は、18世紀半ばの新しいアクターとして登場し、特権的な集団となった。彼らは国家支配を避けることも、従属的集団として支配層に吸収されることもなかった。彼らの持つ戦闘と貿易の技術は、当時のように小国家が互いに抗争し、海産物が重要な貿易品となった時代の国家支配者にとって、とりわけ有用なものであった。海上戦闘と貿易における移民の特殊技能は、彼らに国家支配者と交渉する力を与えた。支配者たちは、海洋移民を自国に引きつけるために、税の免除や労働提供義務の削減といった有利な条件を提供した。彼らの軍事力と経済的能力によって、多くの海洋移民が国家内で一定の自律性を維持することが認められた。一方ポンティアナックやムンパワでは、海洋移民は自ら国家を設立し、その支配者となった。

ワレンが検討したイラヌン人と異なり、南西カリマンタンの海洋移民は、彼らの出身地に統合されたネットワークを作らなかった。これは、それぞれの政治的・経済的背景の違いから説明されよう。インドネシア諸島一帯に移住したイラヌン人のほとんどがスール一諸島から来ていたのに対し、南西カリマンタンの海洋移民は、リアウ・リンガ諸島、マラッカ海峡域、スール一諸島といった様々な地域に出自を持っていた。スール一移民の母港であるホロが19世紀初頭まで島嶼部東南アジア東部の重要な貿易ハブの一つであり続けたのに対し、南西カリマンタンに移住したマレー人やブギス人の故地であるリアウは、1780年代のオランダとの抗争後は貿易ハブではなくなった。イラヌン人がホロにおける貿易の卓越したプレーヤーであったのと異なり、南西カリマンタンに拠点を持つマレー人やブギス人は、1820年代以降彼らの主要な輸出先となった英領シンガポールにおいて、中心的な役割を果たすことがなかった。つまり、南西カリマンタンの海洋移民は、スール一移民がホロを中心とする統合されたネットワークを築くのに必要とした条件の多くを持たなかった。

1820年代以降、南西カリマンタンにおけるオランダの影響力の浸透は、海洋移民の生活に大きな影響を与えた。オランダ植民地政府は次第にトゥンク・パンリマ・ブサル・ジャファルのような有力な海洋移民のリーダーの影響力を制限することを試みた。それまで積極的に支持したラジャ・アキルに対しても、1820年代末以降、政府はその行政能力を批判して支援をやめている。そのような試みは必ずしも成功しなかったが、新たなオランダの政策の結果として貿易のパターンが変化したことは、海洋移民の運命に大きな影響を与え

た。スカダナ、ポンティアナック、クタパンの港は、植民地政府によって新たな地域貿易構造の主要港に定められため、より多くの商人や移民を引きつけた。一方、クンダワンガン、クブ、シンパンは、新たな構造の中で有利な条件を与えられず、衰退した。これらの場所で、海洋移民たちは、別の場所に移動するか、あるいは陸上で生計を立て始めるなどして、かつての海洋適性活をやめて素早く生活様式を転換させた。

島嶼部東南アジアにおける海上貿易や海上戦闘の長い歴史を考えるならば、海洋移民は恐らくもっと古い時代から存在したであろう。しかし彼らの数と存在は、18世紀半ばから19世紀初頭にかけて中国・東南アジア貿易が発展した時期に、非常に顕著となった。ところが南西カリマンタンにおいて、彼らの最盛期は短かった。19世紀半ばまでに、オランダ支配下に置かれた彼らの活動は一部の地域ではさらに発展するものの、他の地域では相当程度衰えた。海洋移民の地域政治や経済における重要性は、貿易の変容や帝国主義の拡大によって、大きな影響を受けた。

短命であったとは言え、海洋移民の存在は南西カリマンタンの歴史に重要な足跡を残した。第一に、彼らは多くの港市を作り、そのうちのいくつかは現在まで主要な貿易港として機能している。第二に、より重要なことに、海洋移民は南西カリマンタンにおける「マレー人」の祖型となった。19世紀のオランダ資料は、海洋移民が民族的に非常に混淆していることを認めつつも、彼らを海岸に住むマレー人という一つのカテゴリーとして認識した。このように「マレー人」とは、19世紀のオランダ人の目には非常に緩やかな概念であった。そして現代の南西カリマンタン沿岸部に住むマレー人の少なくとも一部は、このような混淆した人々を起源としているであろう。本稿が扱った時代における海洋移民の起業家精神、移動性、そして混淆した居住などは、今日の南西カリマンタンのマレー人アイデンティティの源泉となったと言える。海洋移民は従来の「国家中心」的な研究史の中では無視され、あるいは海賊として不当に過小評価されてきたが、もし我々が彼らの越境的活動のダイナミクスに正当な関心を向けるならば、彼らが19世紀の転換期の地域社会に大きな影響を残したことは間違いない。

注

1 本稿において西カリマンタンとは現在の西カリマンタン州を、南西カリマンタンとは同州南部、ポンティアナックからコタリンギンにかけての地域を指すこととする。

2 東南アジアの伝統的国家に関する先行研究は、[Day 2002] が詳細に紹介している。バンカ島と北西カリマンタンにおける華人移民の役割については、[Somers-Heideus 1992], [Somers-Heideus 2003] が詳しい。オラン・ラウトとブギス人の移民については [Barnard 2007] が取り扱っている。イラヌン人の移民については、上述のワレンの著作を参照されたい。

3 KITLV DH 357: 2-4, C.L. Hartmann, “Sukadana of Simpang en Matam,” Pontianak, 18 July 1823; Netscher 1853: 14-15; Müller. 1843: 324–26, 332-333; Dewall 1862: 1-2.

4 いくつかの種類の樹木から得られる透明の樹脂の総称。防水効果が強く、染料の防染材などに用いられる。

5 こうした国王の独占が記録されるのは、18世紀末における塩の専売が最初であるが、オランダ人の観察者はそれを新しい習慣とは述べていない。VOC 3553: 89, W. A. Palm, W. H. Stuart, and J. Klaagman to the Governor-General and the East Indies Council in Batavia（以降は Batavia と略す）, Pontianak, 28 July 1779.

6 VOC 3524: 16, Nicolaas Kloek to Batavia, Pontianak, 31 Augustus 1778; Müller 1843: 343-345.

7 VOC 3581: no pagination, W. M. Stuart and J. Klaagman to Batavia, Pontianak, 26 September 1780.

8　ポンティアナックが建国直後に、河川貿易の覇権をめぐって周囲の国と抗争したことについては、［Ota 2010] を参照。

9　VOC 3553: 90, W. A. Palm, W. H. Stuart and J. Klaagman to Batavia, Pontianak, 28 July 1779; VOC 3581: no pagination, W. M. Stuart and J. Klaagman to Batavia, Pontianak, 26 September 1780; VOC 3598: 29, W. M. Stuart and J. Klaagman to Batavia, Pontianak, 4 October 1781.

10　VOC 3524: 24, Nicolaas Kloek to Batavia, Pontianak, 31 August 1778.

11　MK 359, 108: no pagination, Memorie van H. W. Muntinghe over Borneo, Batavia, 31 August 1821; Müller 1843: 343-345. この報告者の作成者であるH. W. ミュンティンヘ（H. W. Muntinghe）は、カプアス川の河川貿易に従事した華人商人を「ストランド・フォルケーレン（strandvolkeren; 直訳は海岸の人々）」と呼んで、上流地域の華人鉱山労働者と区別している。前者は恐らく、海岸部に住む中国出自の海洋移民であっただろう。

12　MK 359, 108: no pagination, Memorie van H. W. Muntinghe over Borneo, Batavia, 31 August 1821; Müller 1843: 361-362, 366-367.

13　VOC 3524: 16, Nicolaas Kloek to Batavia, Pontianak, 31 August 1778.

14　鼈甲とアガルアガルの収集が誰によって行われていたかについては情報がない。

参考文献

一次資料

Nationaal Archief, The Hague, the Netherlands

Archief van het Verenigde Oostindiesch Compagnie (VOC)

Archief van Ministerie van Koloniën (MK)

Royal Netherlands Institute of Southeast Asian Studies and Caribbean Studies (KITLV), Leiden, the Netherlands

Western Manuscript DH 357, C.L. Hartmann, “Sukadana of Simpang en Matam,” Pontianak, 18 July 1823

二次文献

Andaya, Leonard Y. 1995. “The Bugis-Makassar Diasporas.” *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* 68-1: 119-138.

Andaya, Leonard Y. 2008. *Leaves of the Same Tree: Trade and Ethnicity in the Straits of Melaka*. Honolulu: Hawai‘i University Press.

Anonymous. 1829. “Trade with the West Coast of Borneo,” *Singapore Chronicle* 147, 5 November 1829.

Anonymous. 1853. “Bijdrage tot de kennis der Maleijers ter westkust van Borneo,” *Tijdschrift voor Nederlandsche-Indië* 15-2: 226-238.

Barnard, Timothy P. 2007. “Celates, Rayat-Laut, Pirates: The Orang Laut and Their Decline in History.” *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society* 80-2: 33-49.

Barth, J. P. J. 1896. “Overzicht der afdeeling Soekadana,” *Verhandelingen van de Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen* 50: 1-141+ bijlagen.

Chew, Daniel. 1990. *Chinese Pioneers on the Sarawak Frontier, 1841-1941*. Singapore etc.: Oxford University Press.

Dewall, H. von. 1862. “Matan, Simpang, Soekadana, de Karimata-eilanden en Koeboe (Wester-afdeeling van Borneo),” *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 11:1-146.

Francis, E. A. 1842. “Westkust van Borneo in 1832,” *Tijdschrift voor Nederlandsche-Indië* 4-2: 1-34.

Goor, J. van. 1986. “Seapower, Trade and State Formation: Pontianak and the Dutch,” in J. van Goor (ed.), *Trading Companies in Asia, 1600-1830*. Utrecht: HES.

Lewis, Dianne. 1995. *Jan Compagnie in the Straits of Malacca 1641-1795.* Athens: Ohio University Center for International Studies.

Leyden, J. 1814. "*Sketch of Borneo*," *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen* 7: 1-54.

Müller, G. 1843. "Proeve eener geschiedenis van een gedeelte der weskust van Borneo, Matan en andere etablissementen op de westkust van Borneo," *De Indische Bij* 1: 197-375.

Ota Atsushi. 2010. " "Pirates or Entrepreneurs?" The Migration and Trade of Sea People in Southwest Kalimantan, c. 1770-1820." *Indonesia* 90: 67-96.

Paulus. J, David Gerhard Stibbe, and Simon de Graaff (eds). 1917-1939. *Encyclopaedie van Nederlandsch-Indie,* 4 vols + 4 supplements. The Hague: Martinus Nijhoff and Leiden: Brill.

Pomeranz, Kenneth. 2000. *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*. Princeton: Princeton University Press.

Raja Ali Haji Ibn Ahmad. 1982. *The Precious Gift (Tuhfat al-Nafis)*. An annotated translation by Virginia Matheson and Barbara Watson Andaya. Kuala Lumpur etc.: Oxford University Press.

Reid, Anthony. 1997. "A New Phase of Commercial Expansion in Southeast Asia, 1760-1850," in Anthony Reid (ed.) *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900.* Basingstoke and London: Macmillan Press.

Ritter, W. L. 1839. "De oorsprong van Pontianak," *Tijdschrift voor Nederlandsche-Indië* 2-1 (1839): 402-427.

Scott, James C. 2009. *The Art of Not being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.

Somers-Heidhues, M. 1998. "The First Two Sultans of Pontianak," *Archipel* 56: 273-294.

Somers Heidhues, Mary F. 1992. *Bangka Tin and Mentok Pepper: Chinese Settlement on an Indonesian Island*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Somers Heidhues, Mary F. 2003. *Golddiggers, farmers, and traders in the "Chinese districts" of West Kalimantan, Indonesia*. Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Southeast Asia Program, Cornell University.

Sopher, David E. 1965. "The Sea Nomads: A Study Based on the Literature of the Maritime Boat People of Southeast Asia." *Memoirs of the National Museum, Singapore* 5: 1-422.

Treacher, W. H. 1891. *British Borneo: Sketches of Brunai, Saraak, Labuan, and North Borneo*. Singapore,: Government Printing Department.

Trocki, Carl A.1979. *Prince of Pirates; The Temenggongs and the Development of Johor and Singapore 1784 - 1885*. Singapore: Singapore University Press.

Veth, P. J. 1854-56. *Borneo's Wester-afdeeling, geographisch, statisch, historisch, voorafgegaan door eene algemeene schets des ganschen eilands*. Zaltbommel: Joh. Noman en Zoon.

Veth, P. J. 1871. "Verslag over de Residentie Borneo's Westkust 1827-1829," *Tijdschrift voor Nederlandsch Indië derde serie* 5-1: 8-40.

Vos Reinout. 1993. *Gentle Janus, Merchant Prince: the VOC and the Tightrope of Diplomacy in the Malay World, 1740-1800*. Leiden: KITLV Press.

Warren, James Francis. 1981. *The Sulu Zone, 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.

Warren James Francis. 2002. *Iranun and Balangingi: Globalization, Maritime Raiding and the Birth of Ethnicity.* Singapore: Singapore University Press.

Wilkinson, R. J. 1959. *A Malay-English dictionary (Romanised).* 2 vols. London: Macmillan and New York: St. Martin's Press.